

次の文章を読み、この文章の要点を述べた上で、教育の意義についてのあなたの考えを、600字から800字で述べなさい。

孤独とは、ひとりぼっちになることではありません。自分は世の中に必要とされていない、社会のお荷物だ、と思い込んでしまうことです。

小学5年から中学2年まで3年半、学校に行きませんでした。きっかけは体調を崩し、2週間ほど休んだこと。久しぶりに登校し、友達から「ヨシフジが来たぞ」と言われるのがイヤでした。それから、学校には3日ほど行くのが精いっぱい。家で漫画を読んだり、折り紙やゲームをしたりしていました。

勉強や心の成長が遅れてしまったという劣等感。両親の疲れた顔を見て、このままではだめだと焦る。でも何もできない無力感。こうしたことが、ない交ぜになって苦しかった。あるとき、夜中に目覚め、気づいたときは神社の池の前に立っていました。「これはやばい。死んじゃだめだ」と思いました。

意外なことが転機になりました。中1のとき、母が申し込んだ「虫型ロボットコンテスト」に出場し優勝しました。翌年、大阪であったイベントの展示場で、一輪車をこいでいた大きなロボットを見つめました。開発したのは奈良県の工業高校の先生でした。

先生に弟子入りしてロボットをつくりたい。目標ができ、中2の冬から学校に行き、猛勉強して、工業高校に合格しました。私は尊敬を込めて、その先生を「師匠」と呼ぶことにしています。

高校では電動車いすづくりに熱中しました。何とか「社会復帰」を果たしましたが、課題は人付き合いでした。私が折り紙が得意なことを知った師匠は、養護学校との交流を勧められました。折り紙を教えて仲良くなれました。科学コンテストに出るため、プレゼンのやり方を師匠から鍛えられました。「ここまでやるか、と思わせるまでやらなあかん」。何度も言われた言葉が忘れられません。

車いすがきっかけで高齢者や体の不自由な方と話をすると、孤独に苦しんでいることが分かりました。私だけではないんだ。孤独を解消するために人生を賭けたい。そんな気持ちが強まりました。

孤独の解消に取り組む者が人とコミュニケーションをとれないのでは、話になりません。大学生のとき、奈良から大学のある東京までヒッチハイクしました。トラック運転手と会話を弾ませるにはどうするか。相手の話に大きくリアクションすると、機嫌良く返してくれました。

私はロボットコミュニケーションを名乗っています。人と人とのコミュニケーションを支える。そんなロボットを開発する仕事です。分身ロボット「オリヒメ」は高さ20センチ余り、重さ600グラムほど。目の部分にカメラがあり、映像は遠く離れたところのパソコンで見ることができず。マイクを通じて会話もできる。200台ほどが活躍しています。

私たちは満員電車に乗っても外へ行きません。人に会い、社会に参加するためです。体の不自由な方にとつての車いすもそういう存在です。でも体の移動ができない人はどうしたらいいでしょうか。オリヒメは、そんな人たちの「心の移動手段」です。筋力が衰えるALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者さんも、目を使って操作できます。孫の結婚式に行けない高齢者の方が、オリヒメを出席させれば、会場との一体感を味わえます。オリヒメはうなずいたり拍手をしたりできる。まるでそこに人がいるようです。

私が代表を務めるオリイ研究所の企業理念は、テクノロジーを使って人の孤独を解消することです。希望とは、今までできなかったことが新しい道具によってできるようになること。分身ロボットもそんな道具の一つです。

遠隔操作で動くオリヒメは、人工知能ロボットではありません。私が学校に行けるようになったのも師匠をはじめ多くの人との出会いです。人を本当に癒やすことができるのは人しかいない。

家や病院から出られず、孤独を感じている方が、会いたい人に会え、社会参加できる。そんな未来をつくっていききたいのです。

(朝日新聞2018年1月5日より)

受 験 番 号

人を癒せるのは人だけ 吉藤健太郎